

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年11月1日発行

(毎月1回1日発行)

第15巻第11号 通巻173号

11 月号

2020



滔々と坂東太郎蒲は穂に

草虱とは畦道を来し証し

穏かな日なり狐の剃刀が

今生の一会を秋の宵螢

象潟の雨の鴨上戸かな

網ほほづき昔噺に鬼の出で

舟轆轤ぼつんと雀蛤に

ひとところ鶏頭の庭子規の庭

鷹の羽芒午後には雨となると言ふ

乾かざる萩の下露鬼城の忌

無心とは啄木鳥が樹を叩く音

林火の忌けふ鮮やかに白鳥座

山路来て鬼の捨子の鳴く夜かな

# 無心とは

主宰作品

増成栗人

# 「鴻」の歳時記（秋編）

抽出 佐久間敏高

秋 十二神将一体ごとの秋の黙 増成栗人

秋 流鏑馬や鎌倉宮の風は秋 河合公八郎

新 涼 新涼や辞書の頁の折れやすし 森川淑子

秋 深し 深秋の古書肆の棚の三国志 田辺満穂

二百十日 二百十日蝦夷あぢさゐの終のいろ 北原沙織

秋 彼岸 匂ふほど研ぎし包丁秋彼岸 三代川朋子

秋 澄む 澄む秋の白墨で書く賢治の詩 神野未友紀

秋 麗 大仏の胎内を出て秋うらら 小原信争

鰯 雲 余白とふ美しきもの鰯雲 林 未生

月 手鏡に知らぬ自分がゐる月夜 並河裕子

名 月 満月や切手のなかの深海魚 田中一光

後 の 月 十三夜なりマニキュアの乾ききる 中島 宙

星 月 夜 沖縄の古酒こそよけれ星月夜 小林良作

星 月 夜 二期作の国に生まれて星月夜 森 祐司

天の川 生かされて澄みし銀河を眺めぬ 黒川みつ恵

秋 風 骨壺の妙なる白さ秋の風 吉田鴻司

秋 風 苞にせむ木の実のジャムと秋風と 石島かず

秋の雨 一舟もなし秋霖の常夜燈 赤峰ひろし

霧 妖術のやうに霧立つ山上湖 田邑利宏

山粧ふ 化粧ふほど哀しき山となりけり 谷口摩耶

山粧ふ 放水のダムあり山の粧へり 生井ちよみ

花野 天国はこの大花野かもしれぬ 荒川心星

花野 暮るとはうすむらさきの大花野 美濃律子

花野 スカーレットオハラと歩く大花野 小林和子

水澄む 水澄むや白磁の壺の肌触り 青木まゆ美

新米 甲斐駒の水清らかに今年米 相川 健

秋 扇 畳まれて秋の扇となりけり 守屋吉郎

豊年 一村がまるごと豊の秋の色 伊藤啓泉

盃蘭盆会 香煙の流れ門前町の盆 佐藤 哲

汀女忌 秋潮の襲鮮やかに汀女の忌 水沢和世

蛇笏忌 置かれぬるひよんの実一つ蛇笏の忌 槇尾麻衣

蛇笏忌 蛇笏忌の山湖は秋の色となる 北村 操

小鳥 蔵窓はくわんおんびらき小鳥来る 五十嵐敏子

小鳥 廢校に千の落書小鳥来る 足立枝里

雁 湖目指すかりがねが列組み直す 山口優子

蝸 夕映えの野に蝸の染みとほる 渡辺清

蜻蛉 山の日の透けてとんぼの翅静か 山岸明子

蛭 蛭 きちきちの斜め斜めに跳ぶ日暮 井上つぐみ

林檎 林檎齧る日のきらきらと波頭 半谷洋子

紅葉 日の届き来よ水底の散紅葉 中内敏夫

紅葉 仰ぎ見る柱状節理谷紅葉 針谷忠郎

新松子 新松子潮上りくる浮御堂 竹山一子

ななかまど ななかまど揺れて鴻司の忌の近し 飯川久子

葉鶏頭 雁来紅沼より雨の上がるらし 横尾かな

コスモス コスモスの明るき方へ枢出づ 高笠栄子

芒 芒野をモーゼのごとくすすみけり 後藤兼志

尾花 子規庵に尾花の一穂あれば足る 良知悦郎

曼珠沙華 逍遙の道の傍への曼珠沙華 大沼経子

水引の花 祠まで水引草の淡き紅 立石まどか

露草 また貨車が来る露草のひとところ 北川博司

# 羽音集

増成栗人 選



齒切れよき言の葉一つ秋の水  
 鯉跳ねて色なき風の生まれけり  
 輪唱のかなかなかなに迎へらる  
 笥なすつくつく法師筑波晴  
 炎の色の鬼灯の実を手のひらに  
 薔薇園の道なだらかに曲る道  
 筑波山麓一閃のつばくらめ  
 枇杷は実となり沼尻の風の音  
 四葩には身幅ほどなる径がよし  
 一人座す樟の大きな緑蔭に  
 顔浮かび浮かばぬ名前前秋暑し  
 生も死も一人に一つ流れ星  
 風景のくるりと回る芋の露  
 片仮名は乾いた文字や秋の蟬  
 湧き水や武州門前走り蕎麦  
 打上げ花火帰りの道の闇深し  
 全員にゆきわたるやう西瓜切る  
 風鈴の音がふるさとの音であり  
 扇子開けば母の香のしてゐたり  
 打ち水の柄杓の竹のあをさかな

船橋 藤原明美

土浦 小林和子

松戸 吉清和代

大阪 遠藤 泉

俳誌のサロン

## ちよつとせま 第18回

### 「蒲田・ベレー帽の酒脱」

鈴木 泉

虹の都光の港  
キネマの天地

「蒲田行進曲」（堀内敬三・作詞）の冒頭。元々は映画『親父とその子』（五所平之助監督）の主題歌だが、私はつかこうへい原作の同名劇で知った世代であり、好きな歌だ。かつて蒲田には松竹蒲田撮影所があり、「映画の都」として有名となった。しかし現在、残念ながら蒲田に映画館はない。

私は散策先で銭湯を見つけて入るのが好きなのだが、蒲田周辺には黒湯が湧く銭湯が数多く、一つ風呂浴びたことがある。真つ黒い天然温泉は海藻エキスを含み肌がすべすべになる。少しとろみがあるのが特徴的だった。

近隣には羽田空港があり、京急蒲田駅からは羽田空港線が伸びている。沿線には穴守稲荷や大鳥居などがあり、私は正月の初詣によく歩く。

空港と向かい合う大鳥居は、GHQの取り壊し命令や撤去の話が出るたびに工事関係者の事故が相次いだという逸話がある。

現在は河口付近に移築され町のランドマークとなっている。

多摩川河岸には船宿が並び、大鳥居をかすめて飛行機が滑るように飛び立つ。羽田の晴れやかな風景である。

堤防の一本奥の道路にはかつての赤レンガ堤防が残っている。場所によっては住宅の塀のようになっており、町歩き好きにはたまらない光景だ。近くに銭湯があるのも見つけてはいるのだが、まだ入れていない。

蒲田といえば、大楽寺に吉田鴻司先生が眠る。私は生前お会いできなかったが、鴻司先生のエピソードを多くの方から聞いている、ご挨拶も兼ねて墓前に手を合わせに訪れた。

脱ぐ手套なほ鉄握る形して

少年工のいたる傷に冬日濃し

吉田鴻司

第一句集『神楽舞』からの句。鴻司先生は若き日、町工場での鉄工生活を送られていた。蒲田のある大田区は約三千五百の工場がある「ものづくりのまち」として知ら

れている。

かつての少年頃へのまなざしと同様に今もこの街のものづくりを見守っているに違いない。

ベレー帽茶に変へ近江春となる

トレードマークであったベレー帽。全句集の表紙にもベレー帽姿のイラストがあらわれている。私にとって鴻司先生のイメージはこの軽妙酒脱な姿である。とはいえ始めから軽妙であったわけではなく、掌を油まみれにし体中に鉄の臭いが染みつく生活を経ての後年の酒脱だったのだと思う。

大楽寺のお墓参りの後は、多摩川の河川敷まで出て、六郷土手を歩いた。取材時、二〇一九年の台風十九号により氾濫した爪跡が河川敷にはまだ残っていた。痛ましい光景を前に、ボール遊びをしている元気な子供たちの姿が印象に残っている。



蒲田・大楽寺

俳誌のサロン

# 柔庵閑話 29

虫丸



俳句では  
往々にして  
あることだね

これは！  
という切り口を  
思いついて  
表現も工夫に  
工夫を重ねた句ほど  
句会で先生からも  
みんなからも  
理解されません



俳句では  
無理なりキミが  
ない表現の方が

自分の発見や  
思い込みに  
囚われ過ぎると  
その説明をしたくて  
表現が回り  
くどくなる  
身の回りの  
自然や  
ごく日常の些末な  
ことから素材にする



なる  
ほど

共感を得られる  
ことが多い  
ピッチングも  
目一杯で  
投げ込まないで  
リキミを抜いて投げたら  
ノーコンが直るかも  
知れないよ



①  
②  
③  
④  
リキミをなくしたら  
ド真中のストライク  
ばかりで……  
めった打ちです……！

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>